

2014年9月7日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書18章1～8節

説教：失望しなくてよい

1 「失望してはならない」と言われても

1) 失望してしまう現実

これからしばらくルカの福音書を見て参ります。皆さんは1節のことばをどう受けとめたでしょうか。「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」いつでも祈るべきである。できるかどうかは別として、言われていることは素直にそのとおりに受けとめることができるでしょう。けれども後半の「失望してはならない」は、どうでしょうか。失望してはならないと言われても、時には失望してしまう。それが私たちの現実ではないですか。それなのに、こんな風に言われてしまうと、失望することも罪であるかのように聞こえてしまいます。「失望することも許されないのか。」もし本当にそうだというのなら、窮屈で息が詰まりそうになります。

2) 「失望しても無駄である」

もちろんイエスは私たちに窮屈にさせるためにこのようなことを語る訳はありません。1節を、穏やかな表現で言い直せば、「失望する必要はありませんよ。」もうちょっと積極的な表現をすると、「失望しても無駄である。」そんな意味になります。そう言われれば、安心できますが、でもそれはどういうことでしょうか。

普段皆さんは、「無駄なことはできるだけしない」と考えているはずです。時間を無駄にしない。無駄なお金は使わない。そう言っています。その延長線上で、こんなふうに

言ってみたらどうでしょうか。「聖書で失望しても意味がないと言われているのだから、失望は無駄である。失望するのは止めよう。」頭ではそうなります。でも実際そんな簡単な話ではない。どんなに無駄だと言われても、何かがあれば失望してしまいます。

そもそもどうして失望が無駄だというのでしょうか。その理由を知りたいと思います。理由がきちんとわかれば、ひとときは失望したとしても、失望から立ち直るきっかけにはなるかもしれません。

2 たとえ

1) 神を恐れぬ裁判官とやもめ

イエスはたとえ話を語ってそのことを説明しています。神を恐れず、人と人とも思わない裁判官が、ひっきりなしにしつこく訴え出てくるやもめのことをうるさく思い、ずっと放っておいたのですが、とうとう根負けしてやもめの訴えを取り上げ、裁判をしてやる。そんな話です。このような傲慢な裁判官でさえ、しつこくあきらめずに訴え続けるのなら、やもめの訴えを取り上げて裁判をする。まして神はあなたがたを放っておくはずがない。あきらめないで訴え続けなさい。祈り続けなさい。そうすれば必ず神は願いを聞いてくださる。そんな意味です。

2) 努力して願い続けなければかなえられない？

祈ることの大切さを何度も聞いてきておられます。ですからこのたとえ話が言おうとし

ていることは、確かにそのとおりと思います。でもすつきりしません。疑問が残ります。

このやもめは、私たちのことを指しています。神さまは、このやもめのように何度も訴え続けなければ動いてくれないのか。もしそうだとするならどこかの宗教と同じです。百回とか千回とか念仏を多く唱えれば唱えるほど功德を施すことになり、それで神や仏は人間の願いが聞いてくださる。私たちの熱心さとか、努力というものがなければ祈りは聞かれる。けれども、努力が足りなければ祈りは聞かれない。結局そんな話にすり替えられていきます。「なんだ、やっぱり信仰は人間の努力なのか。」そんなはずはありません。

では、このたとえ話で主は何を教えようとされているのか。別の側面から考えていきます。

3 人の子が来られたとき

1) いつのことか

ヒントは8節にあります。「あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてください。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

人の子とは、イエスがご自分のことを指すときに言うことばです。問題は、「人の子が来たとき」とはいつを指すのかにあります。二つの可能性があります。一つは、イエスはすでに二千年前に来られた、そのことを指すという考え方です。もしそうであるなら、地上に信仰があるのかどうか、それは当時の人たちのことを指していることになります。そうか今の私たちとは関係がなくなるので、ちょっと安心します。

ところがもう一つ別の意見があります。こ

れは主がもう一度来られる再臨の時のことを指している。そういう意見です。もしそうなら、このことはにわかに関係していきません。あなたには信仰があるのかどうかと問われているようで、不安になってしまいます。いったいどっちなのでしょう。

結論から言えば、二千年前に来られたときのことを指し、再臨のことも指しています。昔の話ではない。やっぱり自分にも関係があります。ドキッとしましたか。失望してしまいましたか？安心してください。失望する必要はありません。なぜそう言えるのか。これから見ていきます。

2) 人の子が来られたとき、人は信仰を失ったが

7節と8節の前半を読みます。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてください。」

さきほどこれは、祈り続けなさいという意味があると言いました。では、いったい神はいつ私たちの訴えを取り上げて、選民のためにさばきをなさるのでしょう。そもそも、人々は神に訴えたことがなかったのでしょうか。とんでもありません。人々は神に訴え続けてきたのです。旧約聖書を見ればそのことが書いてあります。たとえばダビデも詩篇13篇で祈っています。「主よ、いつまでですか。」早く正しいさばきをしてくださいと、何度も祈っている。旧約の時代、ダビデから数えただけでもおよそ千年にわたって訴え続けた。その訴えに神はいつ応えてくだ

さったのか。もしかして、まだ応えられていないのですか。いいえ、神はすでに応えてくださったのです。いつですか。どんなふうにしてですか。むずかしい話ではありません。新約の時代になって、主が来られました。人の子が来られました。神である方が私たちのところに下って来てくださり、正しいさばきをしてくださいました。

どのようにしてさばきがなされたのですか。主ご自身が十字架におつきになりました。私たちがさばかれなければならなかったのに、この方が身代わりとなってさばかれました。

そうしますと、8節が何を言おうとしていたのでしょうか。主はまるで他人事のように、「神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます」と語っていますが、これはご自分のことです。ご自分がさばかれていく、主の十字架を指しています。

このとき、信仰はどうなったのでしょうか。地上に信仰が見られたのか、それとも見られなかったのか。どちらですか。十字架を見ればわかります。そこに神の子がつるされていました。もし地上に信仰があったのなら、神の子が十字架につるされるはずはありません。地上に信仰が見えなくなったことの証拠、それが十字架です。

では、まったく信仰はなくなったのか。いいえ、一つだけ例外がありました。十字架につるされていたイエス・キリストです。主だけが、あのとき地上で一人信仰を持ち続けていました。「はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」あなたがたの信仰は大丈夫ですかと、問われているようなみことばでした。でも実は、イエス・キリストご自身のことを指すことばだったのです。

3) もう失望には意味がない

主は、「失望しても無駄です、意味がありません」と語りました。どうしてか。神は、私たちの訴えを聞いてくださいました。このまま放っておく訳にはいかない。そう思ってください神ご自身が私たちのところに来られ、主がさばきを受けられました。すでに訴えは聞かれ、さばきはなされたからです。だから失望しても無駄ですと言っています。

具体的にどんなことか考えてみましょう。たとえば、今日の前に「もうだめだ」と思うようなことが起きたとします。当然失望したくなります。けれども、すでに正しくさばきがなされています。大切なものを失ったと言うのなら取り戻してくださいます。そのような意味です。ある人に大きな負い目を負っているのですというのなら、この方がすべて返してくださいます。十字架のさばきとはそのような意味だったのです。

信仰についても同じことが言えます。私たちの信仰は、風が吹けば飛ばされてしまうようなまことに頼りないものです。たとえ信仰をなくしてしまうことがあっても、この方が最後まで私たちの代わりに信仰を持ち続けてくださいました。それが十字架なのです。

そうしますと、私たちはいったいいつ失望するのでしょうか。もうすべてのことは「けり」がついています。変な言い方ですが、どんなに失望したくても失望できない。これが私たちの置かれている状態です。

もちろん、私たちは弱い者ですから、気持ちは落ち込むときがあります。絶望したくなるときがあります。けれども主は語りかけてくださいます。「失望しなくてよい。わたしはすでにあなたのために、正しくさばきを受

けたのだから。」

失望したとき、励まして下さる主のみ声を
思い出したいと願います。